

平成14年度認定 (No.32)

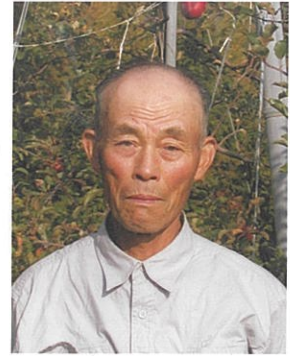
農業名人 (梨・りんご名人)

うらかみ あけみ

浦上 明三

昭和8年生まれ

中川村片桐在住



切ったり接いだりして、3年先を楽しんでいる

祖父(丑太郎さん)が、蚕の種屋だったので、自分は蚕室で育った。父(恒雄さん)は、昭和8年に柿、9年に梨を桑園に植えた。出征し、太平洋戦争が激しくなり、手間もなくなって切ってしまったが、復員後再び梨を植えた。現在は、梨60a、りんご70a、桃・すもも10aで果樹が経営の主体である。

中川は果樹の適地だ。夜、昼の温度差があるので味がよい。中央と南の両アルプスが屏風になって、台風の被害を軽くしてくれる。中川の果樹は生き残れると思う。

果樹は、冬から忙しい。正月明けから、花の咲く頃まで剪定を続ける。国道沿いの果樹園を4月に剪定していると、「何か理由があるかね?」と声がかかる。一人でやるから、仕事が間に合わないだけだ。

4月末以降の、りんごの花摘み、梨の交配・摘果には人手が欠かせない。近所の主婦や果樹ヘルパー、シルバー人材センターをお願いする。人手は延べで、最低でも60日、多ければ100日お願いしている。花摘み、摘果は多くの人の手を借りないとできない。梨栽培は、人海戦術だ。

今年は、摘果の労力を減らすために、限定受粉にとりくんだ。1個ならせる位置には、1個だけを受粉させる。効率的だった。

年間最低6回はする草刈りについても、ナギナタガヤの草生栽培で省力化している。9月中旬に種を蒔き、翌年6月~7月に枯れて倒れる。これが競合する雑草を抑えてくれる。



今、梨は、幸水から秋月へ品種更新している。お客様は幸水を求めるが、値段が下がるばかりで転換を考えざるを得ない。また、すももを始めた。生食で高級志向の「貴陽」という品種だ。中川で広まる可能性がある。

ほ場の一部で、いたずらをする。おっかあに怒られるが、切ったり接いだりして、いつ実がなるのか、どんなものができるか、3年先を楽しんでいる。それが果樹の楽しみだ。